

(第4回) 長期的な土地利用の在り方に関する検討会<概要>

令和2年10月16日(金) 14:34~15:51

I. 瀬尾氏説明(耕作放棄地を活用した繁殖和牛の放牧について)

○繁殖和牛経営への就農と放牧導入の経緯

- ・現在の経営規模は、放牧地 8.1ha(借地 7.8ha)、採草地 0.5ha(借地 0.5ha)。労力は、夫婦二人である。
- ・茂木町は典型的な中山間地域で、耕作単位が狭く、営農には大変な努力が必要で耕作放棄地も多いため、繁殖和牛がここでは一番適しているだろうという考えに至った。
- ・下河原地区には地権者が延べ 25 名おり、地域住民の理解を得るため、県、町、農協の協力を得て説明会を開催し、信頼関係を築くことで、徐々に放牧面積の拡大が可能となった。

○放牧による効果

- ・牛の姿が見えないほどの耕作放棄地でも、牛が野草を食べることにより、放牧開始後 20 日前後で牛の姿が見えるようになる。その後、トラクターで耕起すればきれいな草地となる。
- ・野草を利用すれば、コストの多くを占める餌代を抑えることができる。

○放牧を行ったことによる気づき

- ・繁殖和牛経営の軽労化、低コスト化には放牧の導入がベストだと感じている。
- ・規模拡大に当たり、耕作放棄地は安く集積できる面がある。
- ・放牧場所の設定には、周辺農地や地域住民への配慮が不可欠。
- ・長期的・安定的に土地が利用できることが望ましいが、個人で農地の権利調整を行うことは困難な場合がある。
- ・将来の土地利用について地域で合意形成が得られていると、経営方針が立てやすい。

○将来のビジョン

- ・廃用牛の放牧や、放牧地で子牛の出産と育成にも取り組み、放牧頭数の増加を図りたい。
- ・耕作放棄地を活用するため、農地中間管理機構を通じて放牧地化を図りたい。また、林間放牧にも取り組みたい。

○その他

- ・放牧を導入・継続するには、地域住民の理解が重要。そのため、積極的に地域の行事に参加するなど、地域に溶け込み、信頼関係を築くことが大変重要。
- ・去年の台風 19 号での那珂川の氾濫により被災した際には、農研機構畜産研究部門や宇都宮大学の学生など多くのボランティア等の援助や国の補助があったことを感謝したい。

II. 質疑応答

(広田委員：岩手大学 名誉教授)

○ 地権者や地域の方が、放牧する際に一番気にされることは何か。

→ 臭い、ハエやアブ。和牛は臭いはないと説明してもなかなか信じてもらえなかった。今は地域との信頼関係ができたので、農地を貸してくれるようになった。(瀬尾氏：瀬尾ファーム代表)

(林委員：金沢大学人間社会研究域人間科学系 准教授)

○ 繁忙期にはアルバイトを雇っているのか。また、夫婦二人ではこの規模で手いっぱいか。

→ できればもっと軽減したい。台風 19 号の被害から復旧し、軌道に乗れば、常時アルバイトを雇うことも考えている。(瀬尾氏：瀬尾ファーム代表)

(高橋委員：山形県置賜総合支庁 農村計画課長)

○ 中山間地域にある急勾配の大峰地区でも、何か牧草等を播種されているのか。

急勾配のところは、平地と比べ、時間の掛かり増し等の差はあるのか。

→ 平地の方がはるかにやりやすい。バックホーで線を張り、水を確保すれば放牧が可能になる。大峰地区は、放牧地に水が入ってこないよう溝を掘る必要があったが、急勾配で危険だったため整備は業者に任せた。牧草を播種しているが、成長は良くない。(瀬尾氏：瀬尾ファーム代表)

(笠原委員：新潟県阿賀野市農業委員会 会長職務代理)

○ 貸し剥がしについて、詳しくお聞かせ願いたい。

→ 農業者戸別所得補償制度が導入された際、1人の地権者から土地を返してほしいとの申入れがあった。信頼関係が重要であり、即返した。(瀬尾氏：瀬尾ファーム代表)

(安藤委員：東京大学大学院農学生命科学研究科 教授)

○ 放牧と通常の飼養を比べると、子牛や肥育牛の成長、1日当たりの増体重に差はあるか。増体重が小さいと一定以上の体重になるまでの飼養期間が長くなり、普通の飼養方法とトータルコストでは差がなくなることはないのか。また、出荷時の価格差はあるのか。

→ 私の放牧地は農研機構畜産研究部門の試験圃場となっており、子牛の増体を毎週測ったところ、通常の飼養と比べても全く遜色なかった。濃厚飼料に関し、チモシーを食べさせる必要がない分、放牧の方が安い。牧草はタンパク質が高く子牛の増体はよかった。また、放牧で現地で分娩させて育成すると、病気がないのが大きい。牛舎だと5年も経つと悪い菌が顕著に繁殖する。(瀬尾氏：瀬尾ファーム代表)

(深町委員：京都大学地球環境学堂 准教授)

○ 植物が違ったり、急斜面を歩くことで牛の足腰が丈夫になる等、斜面地の放牧の利点はあるか。また、面積を確保でき、過放牧にならないよう放牧できれば、牧草を与えず野草のみで放牧することは可能か。

→ 牧草はタンパク質が多く、親牛の発情が来づらいが、野草を食べさせているとよい発情が来る。できれば広い面積で、牧草を播種せず野草のみで放牧したいが、牧草を栽培して食べさせた方が頭数を多く飼うことができる。6ヘクタールの面積で現在の20頭近い放牧が経済的に有利。また、斜面地は水の心配がないことが利点だが、やはり平地が一番楽。(瀬尾氏：瀬尾ファーム代表)

(深町委員：京都大学地球環境学堂 准教授)

○ 斜面の放牧は、平地と比べてよいことはあるか。

→ 斜面は必ず水が出るため、給水の心配がない点では楽である。平地の畑では水がなかなか確保できない。自動給水システムを構築しているが、ポンプが劣化してくる。一方で、大峰地区のような傾斜地では、そこで出産させることは、見えないところもあり厳しい。比較すると平地の畑が一番楽だと思う。(瀬尾氏：瀬尾ファーム代表)

(広田委員：岩手大学 名誉教授)

○ 肉質や自然にやさしい育て方によるブランド価値など、市場の評価の差は出ているか。

→ 放牧牛はブランド化につながると思うが、現時点で価格差はなく、やはり系統の良い牛が良い肉を産出する。肉質に関しては、足腰が強くなるので肥育段階で最後まで順調に食べてくれるようになる(瀬尾氏：瀬尾ファーム代表)

(高橋委員：山形県置賜総合支庁 農村計画課長)

○ 放牧により獣害に対する好影響はあったか。

→ イノシシが放牧場に来なくなる効果は全くなかった。牛を入れて草がなくなると、昼間はまず出て来なくなるが、夜は関係ないようだ。(瀬尾氏：瀬尾ファーム代表)

(池邊座長：千葉大学大学院園芸学研究科 教授)

- 放牧による繁殖経営で一番難しく、助けがほしい作業は何か。

→ 土地の集積。農地中間管理機構により、10 年借りられるとなると安心する。しかし、農地中間管理機構にここを借りたいと要望しても、地権者との調整を自分でやるように言われるので、さらに踏み込んで、土地のあっせんなどもやらせてもらえたらよい。

農業委員は、よほどの人でないと地権者との話合いに一緒に来てくれない。

農地の固定資産税が安すぎるのが問題ではないか。耕作放棄地については 1.8 倍になったように、ペナルティも必要ではないか。また、各自治体の耕作放棄地対策協議会が有名無実化しており、きちんとやらない自治体にはペナルティが必要ではないか。(瀬尾氏：瀬尾ファーム代表)

Ⅲ. 委員からの主な意見等

(安藤委員：東京大学大学院農学生命科学研究科 教授)

- 放牧のための準備はかなり大変で、単に遊休化している資源をつなぎ合わせればなんとかなるという甘い話ではなく、瀬尾さんのようなマネジメントができる方を育てる必要。
- 具体的な支援も必要であり、電気柵を整備するための補助事業なども求められるが、簡単な政策支援で横展開が図られるとは考えにくく、経営者をどう育てるかが重要な鍵。
- 放牧の拡大は農村振興局だけの仕事ではなく、ほかの部局との連携がないと政策も機能しない。

(笠原委員：新潟県阿賀野市農業委員会 会長職務代理)

- (「農業委員は、よほどの人でないと地権者との話合いに一緒に来てくれない」との瀬尾氏の発言を受け、)私たちの場合は、農地中間管理機構を通じて貸したい方の申出があれば、たとえ相手が決まっていなくても、探すというのが農業委員の仕事。委員会それぞれの動き方に違いがあることについて、貸したい人だけではなく借りたい人にもきちんと対応するよう、ある程度統一していかなければならない。
- それぞれの農業委員会がどう動いているのか、透明性を持つことが必要。

(高橋委員：山形県置賜総合支庁 農村計画課長)

- 土地を長期的に守っていくためのポイントとして、最初の段階から行政が間に入って権利調整すれば持続した営農が可能になる点、地域で将来の土地利用に関してあらかじめ合意形成が得られていることが重要だという点の 2 点があった。
- 土地を長期的に守っていくためには、地権者自らが土地について考え、話し合うことをもっと進めていかなければならない。行政がその重要性を認識した上で、積極的に関与していく必要があり、体制整備が重要だということを再確認した。

(林委員：金沢大学人間社会研究域人間科学系 准教授)

- 無住集落や集落ごと耕作放棄地のような地域における土地利用の方法として、放牧に希望を感じた。また、無住だからこそ大規模にできるとも思った。山奥が多い無住集落で放牧が成り立つための最低の条件として、面積や斜面とかマンパワー等を明らかにする必要を改めて感じた。
- 水田や畑と、放牧ではスケール感が異なると思う。これまでの集落の枠組みとは別の考え方も必要になるのではないか。

（広田委員：岩手大学 名誉教授）

- 放牧は、耕作放棄地の解消の１つの有力な手段だと再認識した。
- 今後の経営を立てる上で、地域で将来の土地利用について合意形成が得られていることが重要であり、地権者がその話し合いに参加する機会が必要。
- 政策的には、将来の土地利用について合意形成を得る仕組みである人・農地プランの話し合いが十分に活用されていないので、まさにこの仕組みを使っていけばよいと感じた。中山間地域等直接支払制度も地域の土地利用を考える１つの有力なきっかけになり得るが、何年もやっていると慣れてしまい、改めて長期的な土地利用を考えようという機運にならない。そこは行政が関与し、働きかけないと、なかなか地元だけではうまくいかない。

（深町委員：京都大学地球環境学堂 准教授）

- 耕作放棄という課題を解決する取組が、環境、生態系、文化など多様な価値を生み出しているのを感じた。牛が草を食べていることが生み出している価値が、植物などを調べると見えてくるのではないか。
- 環境の中で大事な場所は、平地と山地の境界部分や水系の部分と言われているが、瀬尾さんは、そこをいい形で維持し、うまく利用をされている。また、庇陰木（ひいんぼく）などは、鳥や昆虫が集まり、植物だけではなく生物全体を含めても大きな貢献につながっている。
- もう少し規模が広がり、牧草を植えずに在来種を活用する形になれば、更に良い方向になる。
- 牛の健康の観点からも放牧は国際的にも称賛されると思うので、環境省とも連携し、放牧の価値がいろいろな観点から見えるようにして、経済的に評価されて取組が広がっていくようにしてほしい。

（池邊座長：千葉大学大学院園芸学研究科 教授）

- ウィズコロナ、アフターコロナと言われる中で、播種した牧草や人工的な塩に頼らず、野草や土や水からミネラルを取ることは、今の時代に合っていて、国際的にも評価されるべき事例だと思う。
- 放牧について、長期的な土地利用を考えた場合、10年、20年経ったときの土地の採算性をいかに良くしていくかという考え方が必要。
- 瀬尾さんのような方がシニアになったときに、人材育成する側になっていくとうまくいくのではないか。
- 農地中間管理機構や農業委員会にどういう役割が必要とされており、何をすべきなのかを明確化し、地権者、農家に役割等が明確に認知されるよう、農林水産省にお願いしたい。

（瀬尾氏：瀬尾ファーム代表）

- 農業委員、農地利用最適化推進委員の役割が重要ではないか。農地中間管理機構等を活用した農地集約が可能になり、農地が安定的に使えるようになれば、放牧に挑戦する人はいくらでもいると思う。

以 上